

Contents

03 Topics

ようこそ、大阪大学へ

平成26年度入学式  
平成25年度卒業式・大学院学位記授与式

12 濃いっ!阪大1 — マチカネワニ編 —

阪大の至宝、マチカネワニ

22 濃いっ!阪大2 — 教育研究編 —

留学生が悩む日本でのコミュニケーション  
～ たかが雑談、されど雑談 ～

24 役員室だより

32 阪大ほっとニュース

37 人事

40 受賞・表彰

42 Information

表紙写真：総合学術博物館へのサイン(左)



表紙写真撮影：クリエイティブユニット 准教授 伊藤雄一



Topics

ようこそ、大阪大学へ

新入生・フレッシュマンの皆さん、  
新しく大阪大学の門をくぐられた全員の方を心から歓迎いたします。

大阪大学

## 平成26年度入学式 総長告辞 &lt;要旨&gt;

## 「適塾」から「世界適塾」へ

大阪大学に入学ならびに進学されました皆さん、おめでとうございます。また、ご臨席いただきましたご家族の皆さま、関係者の方々に心よりお祝い申し上げます。

あらゆる可能性を秘めた前途洋々たる皆さんは、大阪大学の一員として、あらたな人生を踏み出すその第一歩を迎えられました。大阪大学総長としてこの上もない喜びであり、大阪大学は心から皆さんを歓迎いたします。

## 「なぜかと問う」ことの大切さ

皆さんは全国から未来や夢、様々な思いを胸に大阪大学に入学されました。皆さんにとっての大学とはなんでしょう?皆さんは小学校、中学校、そして高等学校などで勉学に励んでこられました。しかし、幼い頃には不思議に感じていたことで、大人になるにつれて、いつの日か「そういうものだ」と思考を中断してしまったものがあると思います。たとえば、宇宙はどのようにして誕生したのか?生命はどこから、どのようにして誕生したのか?なぜ熱帯魚はあれほどきれいな模様をしているのか?確かな答えがわからないことは無数にあります。ある疑問は素朴であるが故に、また他の疑問は日常的であるが故に、多くの人はいつしか疑問すら抱かなくなったと思います。大学とは、このような知識を積み重ねるだけでは解けない疑問を明らかにし、問題の奥深くに潜む原因を浮き彫りにする、あるいは未だ人類が答えを知らない疑問に対する解答を探すところです。

ペニシリンを発見したイギリスの Fleming は、当時感染症治療の薬剤の開発に情熱を傾けていました。その彼が、実験操作のミスで培養皿に混入したと思えるカビの周りでは細菌の生育が阻止されていることに気づきました。普通なら実験が失敗したと捨てるところですが、彼は「カビの成分が細菌の生育を阻止したのではないか」と考えたのです。そして、想定される成分をペニシリンと命名したのです。時に 1928 年のことです。

その後、Fleming の論文を読んだ Howard Florey と Ernst Chain がペニシリンの精製に 1940 年に成功しました。Fleming、Florey と Chain の 3 人は 1945 年にノーベル医学・生理学賞を受賞しました。ペニシリンの発見により世界中で計り知れない命が救われることになりました。

このペニシリン物語は偶然の発見、すなわち「セレンディピティ」の典型的な発見物語の一つとしてよく語られます。しかし、決して偶然で発見されたのではなく、Fleming の優れた観察力と知的好奇心に満ちあふれた柔軟な心が彼をペニシリンの発見に導いたのだと思います。このような知的好奇心に満ちあふれた非連続的で常識を覆すような基礎研究の成果は、人類社会に技術革新を引き起こし様々な革新的な製品となり、あるいは先端医療となり社会に還元されます。さらに、学問が果たす役割には、社会への夢とロマンの供給と言う大きな役割があります。芸術が人の心を豊かにするように、知的好奇心の追求としての学問は、社会に夢とロマンを与えるのです。大学は、未来の原泉であるとともに、人々に夢をもたらします。そのもとは、「なぜかと問う」君たちの知的好奇心です。

## 「物事の本質を見極め 世界に羽ばたく」

皆さんは、日本は勿論、もっと広く世界に目を向け、「社会の変化に対応する」力を身につけなければなりません。では、現代の社会が求める人材、その能力とはどのようなものでしょうか?例えば、決断力、行動力、そして言語運用能力を含むコミュニケーション能力。これらは、しばしば優れたリーダーの素質として語られます。確かにこれらの能力を身につける必要はあります。しかし、急速に変化し続ける現代社会においては、これらの汎用的能力だけでは十分ではありません。これからの社会が求める人材とは、多元的な課題に潜む物事の



本質を見極め、従来からの常識や考え方を超えた課題解決を先導できる人材であると私は考えます。「物事の本質を見極める力」とは、現象として認知可能な事象の奥に潜む、その事象のカギとなるもの、そしてその仕組みを見極める力を意味しています。この力の基盤となるのは、特定の分野をとことんまで究めた高度な専門性です。大学が最先端の研究を行い、それに基づく高度な専門教育を行う意義はここにあるのです。

また、物事の見方の転換も重要かもしれません。例えば、科学技術の力で自然を征服するという発想ではなく、如何にすれば人類は自然と共生できるかを真剣に考える必要があります。また、老・病・死など人間が避けて通れない問題も、今までは生命科学や医学の発展により克服するという姿勢で研究が行われてきました。しかし、そのような発想を転換し、どのようにすれば人類はこれらの問題と共生し、心安らかな人生を全うできるかを、見つめなおす必要があるでしょう。このように、物事を見る時一面から見るのではなく、複眼的に様々な観点から見る必要があります。

これらの視点を養うのは、幅広い教養教育です。教養教育は単に知識の蓄積ではなく、広く柔軟な視点の獲得に繋がるものとして重要です。

## 輝く「世界適塾」を目指して

176 年前に設立された「適塾」を原点として、「懷徳堂」の精神を受け継ぎ、大阪府民の熱意に支えられた本学は、2031 年には大阪大学は創立 100 周年を迎えます。その時大阪大学は、「世界適塾」として世界でトップ10 に入る研究型総合大学になることを目指しています。176 年前の適塾には日本各地から志ある若者が集まり、大いに勉学に励み、適塾で学んだ新しい知識や技量を携え、再び全国に散らばり明治維新の新しい時代を切り開きました。

「世界適塾」には、国内はもとより世界中から研究者や留学生、向学心溢れる人たちが大阪大学の学問と研究を目指して集まり、学問や研究を究め、やがて大阪大学から世界中に羽ばたいていきます。世界適塾元年である記念すべき年に入学された皆さんは、本日より、私たちと一緒にこの大阪大学の大きな夢に向かって新たな歴史の1ページを共に書き継ごうではありませんか。

平成26年4月2日

大阪大学総長



# 学部生 3,510 名、大学院生 2,894 名が 大阪大学に入学

4月2日(水)、大阪城ホールで行われた平成26年度入学式は、満開の桜が新生を迎えました。大阪大学に入学、進学されました学生の皆さん、おめでとうございます。



平成25年度卒業式・大学院学位記授与式 総長式辞&lt;要旨&gt;

## 「グローバル社会における調和ある多様性の創造」



大阪大学から新たな一歩を踏み出さんとされている学部卒業生の皆さん、大学院修士・博士課程修了生の皆さん、専門職博士課程を修了された皆さん、おめでとうございます。これまで皆さんが大阪大学で苦労を積み重ねてこられた努力と研鑽に対して心からお祝いし、讃えたいと思います。大阪大学で学んだ皆さんは、グローバルに活躍できるリーダーとしての資質と能力が備わっていることを誇りに思い、品格と責任を持って社会に進んでいただきたいと思います。

## 「グローバル社会」

人類は長い歴史を経て、人間の活躍の場は比較的「均一性」の社会から、「多様性」の世界へと急激に変化を遂げてきました。言語、慣習、文化、民族、宗教、そして政治や国家、地球上には様々な多様性が存在します。今や地球規模での経済活動やそれに伴う人の交流により人の活動の場は均一性から多様性の存在する空

間へと激しく変化しています。また、地球規模での気候変動、エネルギー問題、食料問題や人口問題、そして感染症問題など様々な原因が複雑に入り組み、それぞれの問題解決が困難な状況になっています。地球規模で語れば語るほど物事は複雑に絡み合い、全ての問題は多様な要因を考えなければ物事の本質を見極めることは不可能な事態に陥っています。様々な紛争は、民族や宗教などの人類社会が有している多様性が基になっている例が多く存在します。人々が国境を越えて国際的に活動する現代においては多様性が人類社会に様々なコンフリクトを惹起します。その意味では多様性はグローバル社会においては大きな障壁でもあります。このため、均一化する必要性、グローバルスタンダードの必要性が叫ばれます。しかし、考えておかなければならない重要な点は、多様性こそ人類を心豊かにする源泉であり、未来に発展するためにはかけがえのない要素であるということです。多様性があるからこそ人類はここまで発展し



てきたし、多様性があるからこそ将来も様々な事態に直面してもそれを克服しさらに発展できる能力を有していると考えられます。例えば、言語一つとってもグローバルに経済活動をするには今は英語が便利かもしれません。しかし、歴史が示すようにグローバルに使用される主たる言語は常に変遷してきました。また、言語は経済活動のほんの一つのアイテムであり、全体の中の一部でしかありません。単なるコミュニケーション手段の一つでしかありません。現在でも実用化されているようにスマートフォンに組み込まれている言語認識ソフトがさらに発展すれば言語の壁は過去のものとなる可能性もあります。

「グローバルスタンダード」という言葉からイメージされることは、「グローバル化」=「均一」であります。事実グローバル社会においては英語が重要な共通言語であり、物事も地球規模に照らして考える必要性に迫られてきました。これを突き詰めて行くと、全ての物事はグローバルスタンダードに基づき均一化する必要があることとなります。もっとも対極に位置するガラパゴス化は失敗の象徴のごとく語られることすらあります。ともすればグローバル化の流れは「均一性から多様性」という人類の歴史に逆行する感すらあるように思います。

## 「調和ある多様性の創造」

グローバル社会に生きるためには、グローバルスタンダードを確立して均一化するのではなく、逆に多様性を理解し、尊重し、維持することであり、かつ多様性を積極的に取り込みイノベーションの創造に役立てることだ

※全文は大阪大学公式ウェブページに掲載しています。



と、私は考えています。すなわち、「調和ある多様性の創造」によってのみ、グローバル社会の平和維持や、経済や社会活動に対するイノベーションを起こすことができるのではないのでしょうか?さらに、このことにより人類社会のさらなる発展があるのではないのでしょうか?様々な多様性が複雑に入り交じるグローバル社会においては、グローバル化、すなわち物事の均一化ではなく、「調和ある多様性の創造」が求められているのだと思います。

言語一つをとっても、大阪大学は25言語という多様な言語をカバーするとともに、アジアの諸言語の研究・教育で日本のトップに立っています。21世紀のグローバル社会において大学に求められる新たな役割は、まさに「調和ある多様性の創造」であると思います。グローバル社会においては多様性を維持しながら、多様性が生み出す障壁を乗り越えることが重要です。

大学は、学問という人類共通言語を有しています。学問は芸術と並んで、様々な障壁を乗り越える大きな力になります。学問を介して人と人との交流により、多様性の維持とそれが生み出す障壁の克服という、相反することの両立が可能となります。大学はこのように、「調和ある多様性の創造」によりグローバル社会に大きく貢献しなければなりません。大阪大学で学問を学んだ皆さんはグローバル社会で大きな役割を担うこととなります。

平成26年3月25日

大阪大学総長

# 学部生 3,375 名、大学院生 2,674 名が 大阪大学を卒業・修了

3月25日(火)、大阪城ホールで行われた平成25年度卒業式、学位記授与式は、それぞれが思いを胸に晴れの日を祝っていました。学生の皆さん、おめでとうございます。

